

東大阪市内出土の製塩土器Ⅱ

才 原 金 弘

I はじめに

東大阪市内より出土した製塩土器の資料紹介をおこなって、3年が経過した。この間、東大阪市域でも他地域と同様に急激な開発が進み、工事に先だって緊急調査を実施した。調査の増加は必然的に製塩土器出土件数の増加となった。前回、資料紹介をおこなった際は8遺跡16例を数えたが、今回、新たに7遺跡10例の追加資料を得た。今までに知られていた遺跡以外に新たに神並遺跡、西ノ辻遺跡、水走遺跡があげられる。東大阪市域で製塩土器の出土例は通算11遺跡25例となった。今回、資料紹介する製塩土器は5世紀中～6世紀の時期のものが前回と同様に多い。また、前回までは、庄内期と5世紀中～6世紀の製塩土器はすでに確認されていたが、今回、新たに神並遺跡、鬼塚遺跡、水走遺跡、若江遺跡の4遺跡で奈良時代のものも確認された。

II 製塩土器の分類

今回、資料紹介する製塩土器は庄内期、5世紀中～6世紀と奈良時代のものがある。庄内期と奈良時代のものは出土量もさほど多くないので各遺跡の説明文中で形態、調整法、色調などの特徴を個々に記した。5世紀中～6世紀のものは、前回同様、調整法で6タイプに分類した。前回と重複するが各タイプごとの特徴をあえて今回も記す。また、今回出土したものの中には、⁽¹⁾形態や調整法のよくわかる資料があるので若干記した。各タイプごとの個体数は表1に記した。表1の★は新資料であり、他は前回にも掲載した資料である。

Aタイプ 内外面をナデ調整するものである。内面は丁寧にナデ調整するが外面は比較的粗雑に調整し、そのため指頭圧痕の残るものが多い。

Bタイプ 外面の調整はAタイプと同様であるが、内面をヨコ方向のハケメ調整する。ハケメ原体は7～8本/cmのものが多い。

Cタイプ 外面の調整はAタイプと同様であるが、内面を貝殻によって調整する。

Dタイプ 外面はタタキによって調整し、内面はナデ調整する。外面のタタキは平行か右下がりのものが多い。タタキを施したため内面に凹凸が著しく残るものがある。タタキ原体は4～5本/cmのものが多い。

Eタイプ 外面の調整はDタイプと同様であるが、内面をハケメ調整する。

Fタイプ 外面の調整はDタイプと同様であるが、内面を貝殻によって調整する。

Ⅲ 製塩土器の出土した遺跡

西岩田遺跡

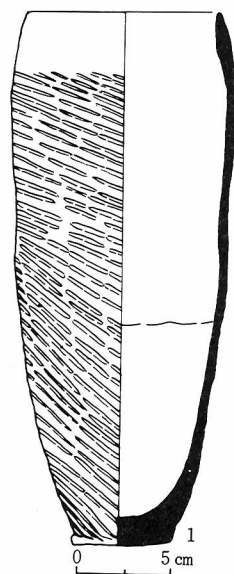
今回、紹介する西岩田遺跡出土の製塩土器は、昭和53年のマンション建設工事に伴う調査で出土した。前回に庄内期のものを2点資料紹介したが、その後、整理作業中に新たに1点同時期のものを確認した。

第1図1は、底部は平底で、胴部はわずかに外方へ張るが、ほぼ筒状を呈する。口縁部は内弯し、端部は尖がりぎみに終る。胴部外面は右下がりのタタキ、内面はナデ調整する。口縁部はヨコナデ調整する。口径10.4cm、器高28.4cm、底部径5.4cm、器壁の厚さ5～8mmを測る。胎土中には砂粒をわずかに含み、色調は赤褐色を呈する。体部下半には二次焼成の痕跡が著しい。

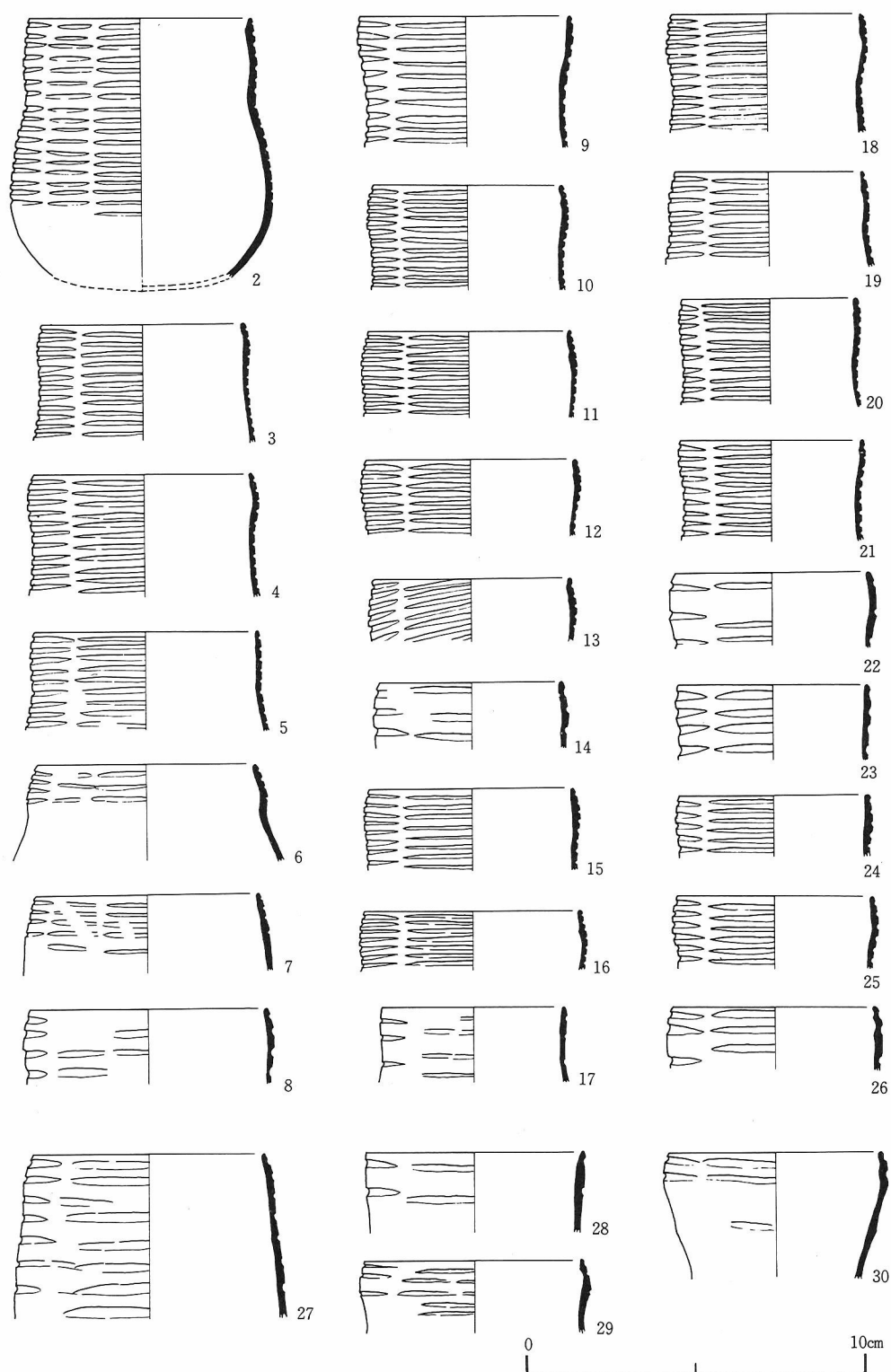
神並遺跡

大阪府と奈良県間に新路線の軌道東大阪線が建設されることになった。東大阪市域は国道308号線中央分離帯を通り、生駒山はトンネルで奈良県と結ばれる。東大阪市東石切町は、大阪府側のトンネル口にあたり、工事が実施されることになった。この周辺にはすでに消滅しているが、若宮古墳群が存在したことが知られていた。当遺跡に工事予定地が隣接するので、昭和56年に試掘調査を実施した。その結果、中世の遺構や遺物を検出し、神並遺跡は周知された。その後、本格的に第1次、第2次調査が順次おこなわれ、縄文時代早期～中世までの複合遺跡であることが明らかになった。当遺跡は標高30～40mの中位段丘上に立地する。

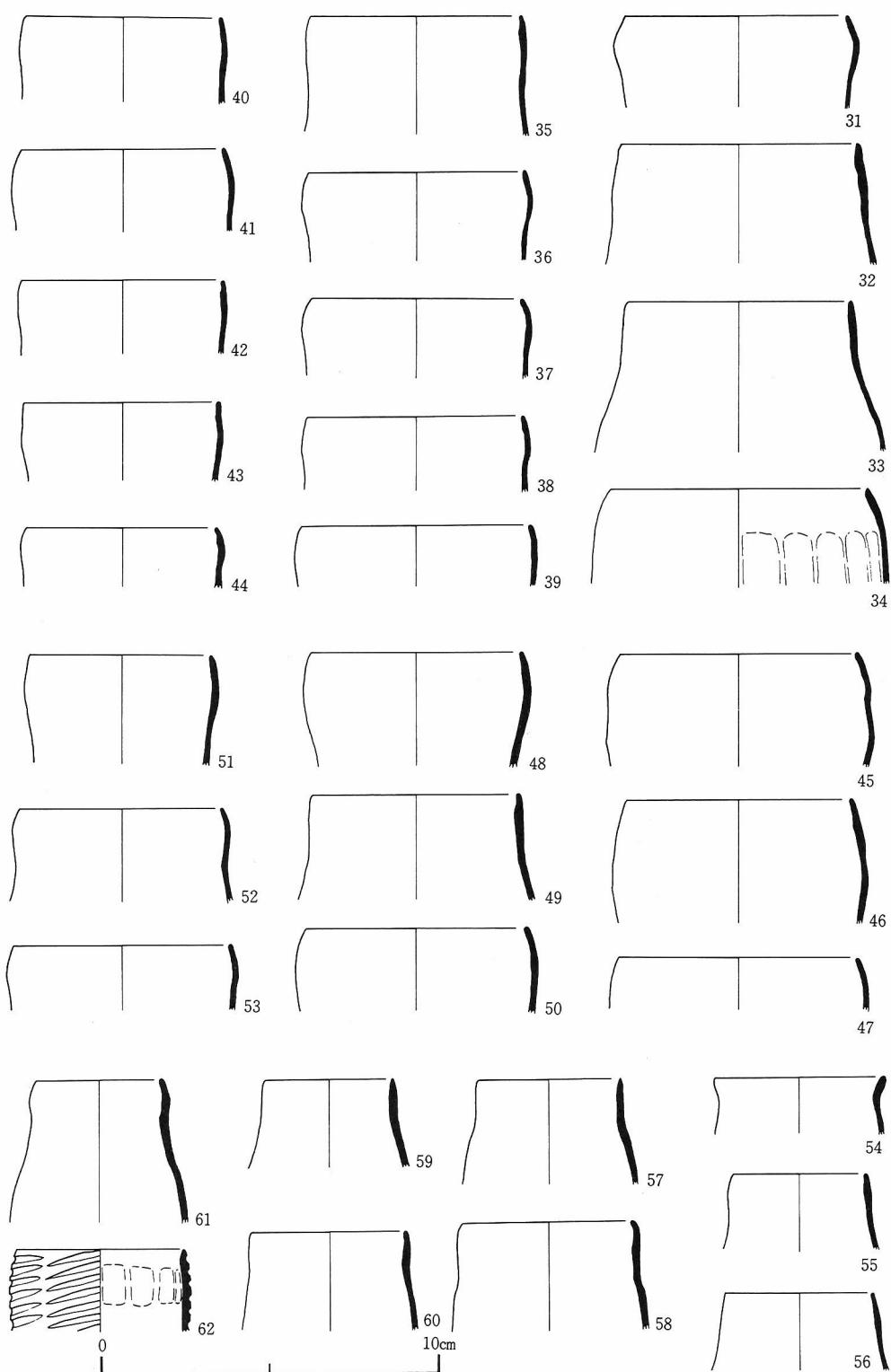
製塩土器が出土したのは第1次調査と第3次調査の際である。第1次調査では中世の井戸、土壇、柱穴や古墳～奈良時代の溝、甕棺墓を検出した。製塩土器は溝及び遺物包含層内より出土した。溝は北西から南東の方向に伸び、幅60cm、深さ20cmを測る。溝内の製塩土器は二ヶ所でまとまった状態で検出し、他へ散乱した状態は認められなかった。北を製塩土器溜り1、南を製塩土器溜り2とする。製塩土器溜り1は30cm×30cmの範囲で厚さ15cm、製塩土器溜り2は20cm×20cmの範囲で厚さ10cmで埋っていた。また、各製塩土器溜りには、製塩土器と灰及び炭の細片が混じっており、これらの間に土の堆積はまったく認められなかった。現場での検出状況からみて、溝内出土の製塩土器は、集落内で短期間に使用された後、廃棄されたと考えられる。また、整理中の観察結果からみるといずれも細片となっており、二次焼成による剝離痕が大部分のものに認められる。溝内出土の製塩土器は共伴遺物がなかったので詳細な時期は決定できない。しかし、層序及び遺構の先後関係や製塩土器の形態などからみて古墳時代後期と考えられる。また、遺物包含層出土のものは、共伴遺物に奈良時代のものも混在するが、5世紀末



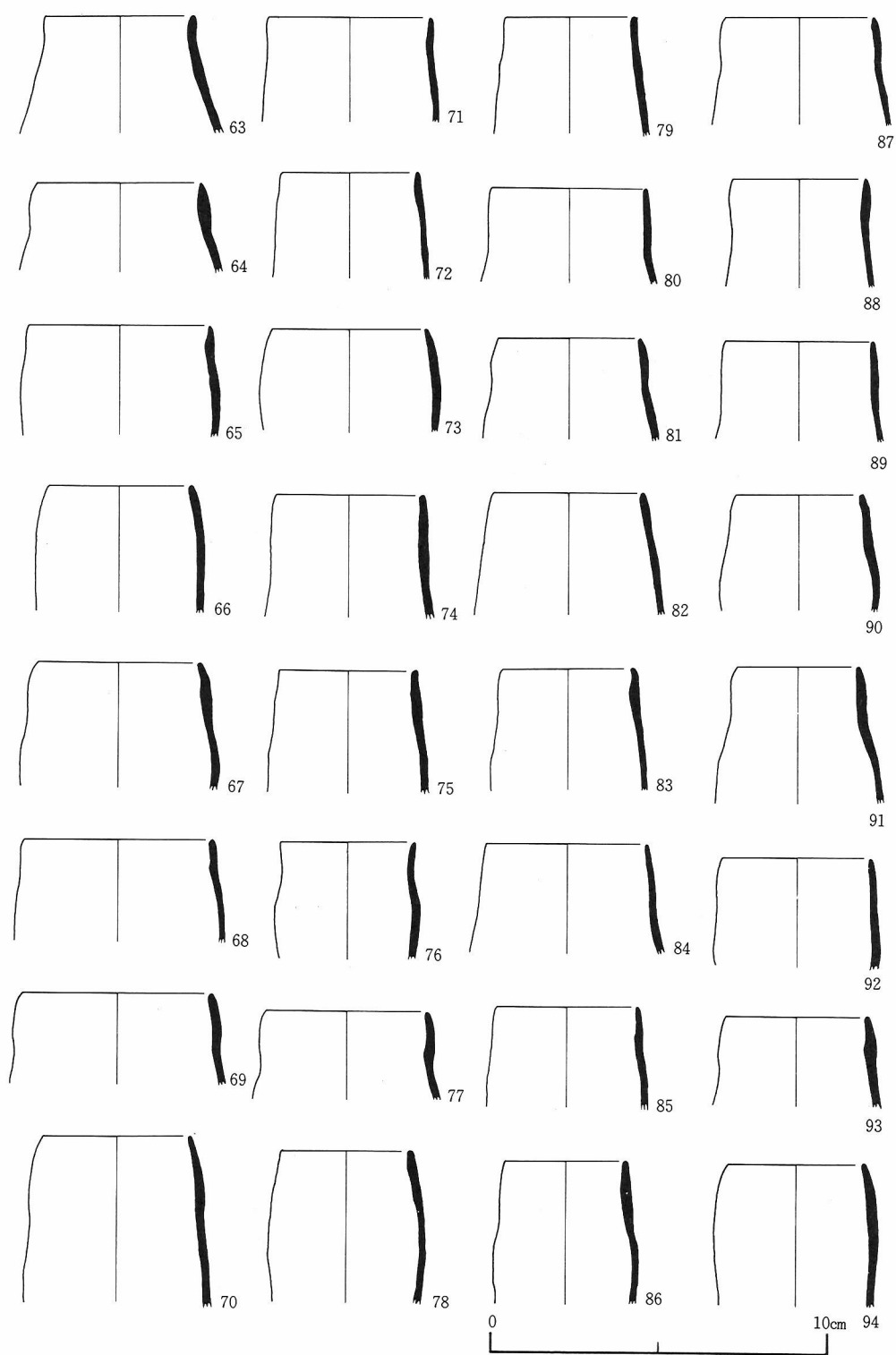
第1図 製塩土器実測図
(西岩田遺跡出土)



第2図 製塩土器実測図(神並遺跡・2～26製塩土器溜り1・27～30製塩土器溜り2出土)



第3図 製塩土器実測図(神並遺跡・31～44製塩土器溜り1・45～53製塩土器溜り2・54～62遺物包含層出土)



第4図 製塩土器実測図(鬼塚遺跡出土)

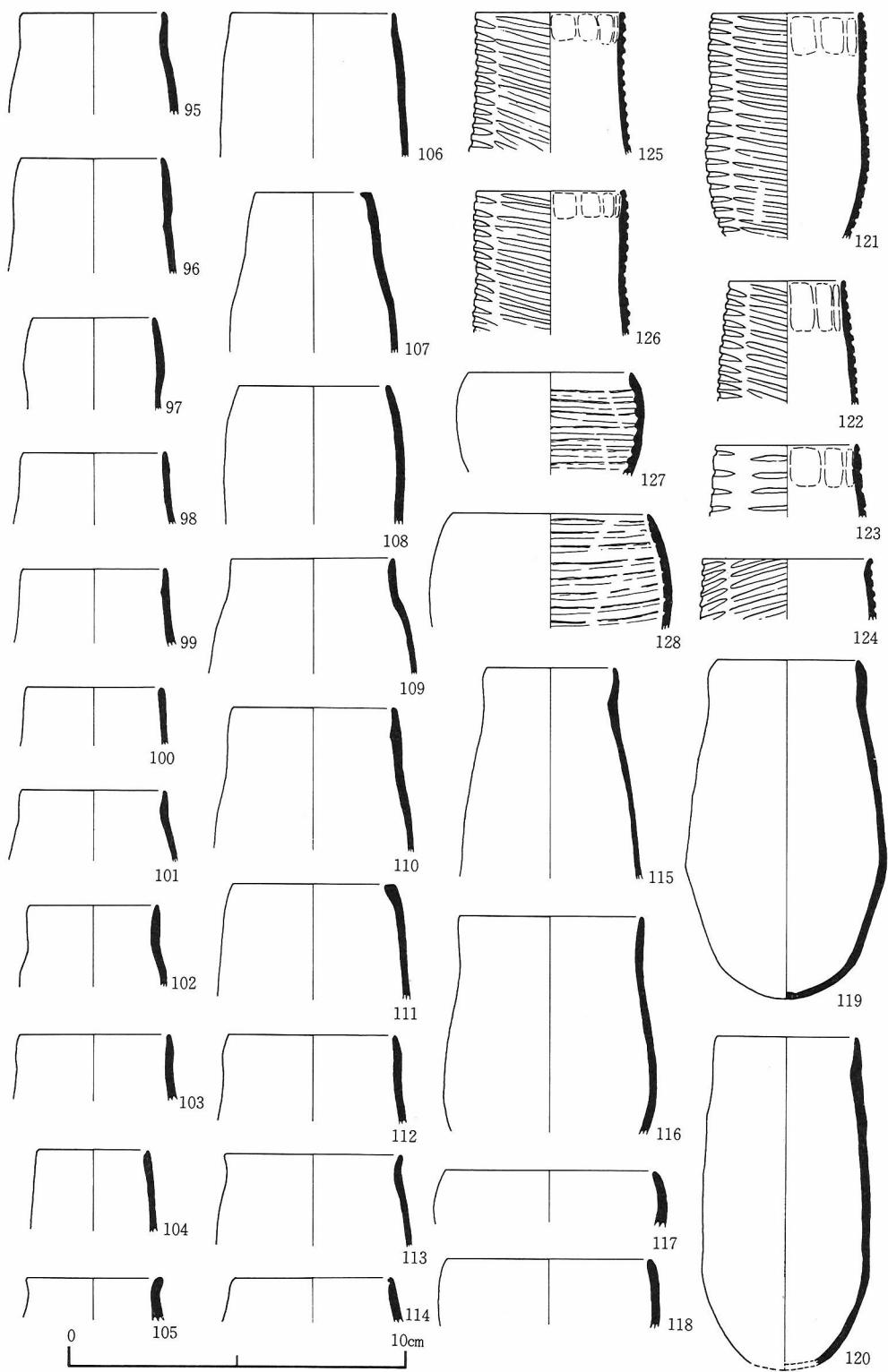
～6世紀の時期が妥当である。第3次調査は第1次調査地の西約100mに位置する。昭和57年度に調査を実施し、地表下約50cmの深さで奈良時代の掘立柱建物、井戸、土壇などの遺構を検出した。製塩土器は奈良時代の掘立柱建物や土壇及び遺物包含層から出土した。共伴遺物は奈良時代の須恵器、土師器、瓦などがある。奈良時代の製塩土器出土量は当遺跡が最も多い。

第2・3図の製塩土器は第1次調査分である。2～26・31～44は製塩土器溜り1、27～30・45～53は製塩土器溜り2、54～62は遺物包含層より出土した。溝内出土の製塩土器で図化しえたのはいずれもAタイプとDタイプである。これらは遺物包含層や他遺跡より出土するものに比して、やや容量が大きく器壁が薄いのを特徴とする。口縁部径は6～8cm、器壁の厚さは1～2mm前後のものが多い。また、Dタイプにみられるタタキも幅が狭く、凹凸も小さい。2は底部を欠損するが、比較的器形がわかるDタイプのものである。胴部下半は大きく張り、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部径6.8cm、推定器高8.1cm、器壁の厚さ2mmを測る。溝内出土の製塩土器は二次焼成による表面の剥離が著しく、調整法の観察が不可能なものや他のタイプとして誤認するおそれのあるものが多い。そのため、今回、溝内出土の製塩土器はタイプ別の破片数は表1には掲載しなかったが、総数は1000～2000点あると思われる。遺物包含層出土のものは124点である。

第9図191～207は第3次調査で出土した奈良時代の製塩土器である。器形のわかるものは191～194がある。192は胴部が口縁部へ移行するにしたがい外方へ張り、口縁部はやや内湾する。口縁部径15cm、器壁の厚さ1.3cmを測る。胴部外面は指ナデ調整し、内面はナデ調整する。193～197、199～204も同様の調整法をおこなう。203は胴部外面に接合痕が残る。191は筒状を呈する胴部より口縁部が直立する。口縁部径11.4cm、器壁の厚さ8mmを測る。胴部外面は指ナデ調整、内面には布圧痕を残す。205～207も同様な調整法である。198は胴部の破片であるが、内面に明瞭なハケメ調整を施す。今回の調査では849点の製塩土器が出土した。この中で外面を指ナデ調整、内面をナデ調整するものは787点あり、器壁の厚さが5mm前後の薄手は554点、1cm前後の厚手は220点である。また、内面に布圧痕を残すものは67点である。布圧痕には疎密があり、1cmあたりに5本以下は3点、6～10本は25点、11～15本は17点、16～20本は15点、21～25本は3点、26～30本は1点、31本以上は3点である。内面に明瞭なハケメ痕を残すものは3点、外面にタタキを施すものは2点である。

鬼塚遺跡

鬼塚遺跡の製塩土器出土例は今回新たに2例加わり、総計3例となった。製塩土器が出土したのは昭和57年のマンション建設工事に伴う調査の際である。調査地点は東大阪市新町であり、標高15m前後の扇状地上である。遺跡のほぼ西北端に位置する。この調査では縄文時代～古墳時代にかけての遺構、遺物を多量に検出している。製塩土器は古墳時代の遺物包含層と溝、土壇から出土している。同時期の遺構で掘立柱建物も2棟検出されている。製塩土器は現地仮称の溝1、2、18、19から特に多く出土している。共伴遺物は須恵器、土師器をはじめ、フイゴの羽口、鉄斧、土製紡錘車、滑石製双孔円板などがある。製塩土器の時期は共伴遺物か



第5図 製塩土器実測図(鬼塚遺跡出土)

らみると5世紀末～6世紀初頭である。また、他の1例は昭和58年度国庫補助事業に伴う調査で出土した。調査地点は鬼塚遺跡の南端に当る。調査は3×5mのトレンチを3ヶ所で実施した。地表下約1mで奈良時代の土坑、ピット、溝や弥生後期のピットを検出した。製塩土器は奈良時代のもので、遺構及び遺物包含層より出土した。共伴遺物は奈良時代の須恵器、土師器がある。

昭和57年の調査で出土した製塩土器の量は、東大阪市域出土例中でも圧倒的に多い。第4図、第5図と第6図の129～140は当遺跡のものである。図化しえたものはA・B・C・Dタイプがある。119・120はAタイプのものである。119は胴部が少し張り、口縁部は内弯する。底部は丸底である。口縁部径4.2cm、器高10cm、器壁の厚さ2～3mmを測る。胴部外面には煤が付着する。120はほとんど胴部の張りはなく、口縁部も直立する。口縁部径4.2cm、推定器高9.8cm、器壁の厚さ2～3mmを測る。136～140はBタイプのものである。136は口縁部が外反するが、他は内弯する。口縁部径4～5cm、器壁の厚さは2～3mmを測る。内面のハケメ原体は6～9本/cmのものが多い。127・128はCタイプのものである。口縁部が大きく内弯し、碗状を呈する。127は口縁部径4.8cm、器壁の厚さ3mm、128は口縁部径5.3cm、器壁の厚さ3mmを測る。内面の貝殻条痕は3本/cmである。今回の調査では1477点の製塩土器が出土した。

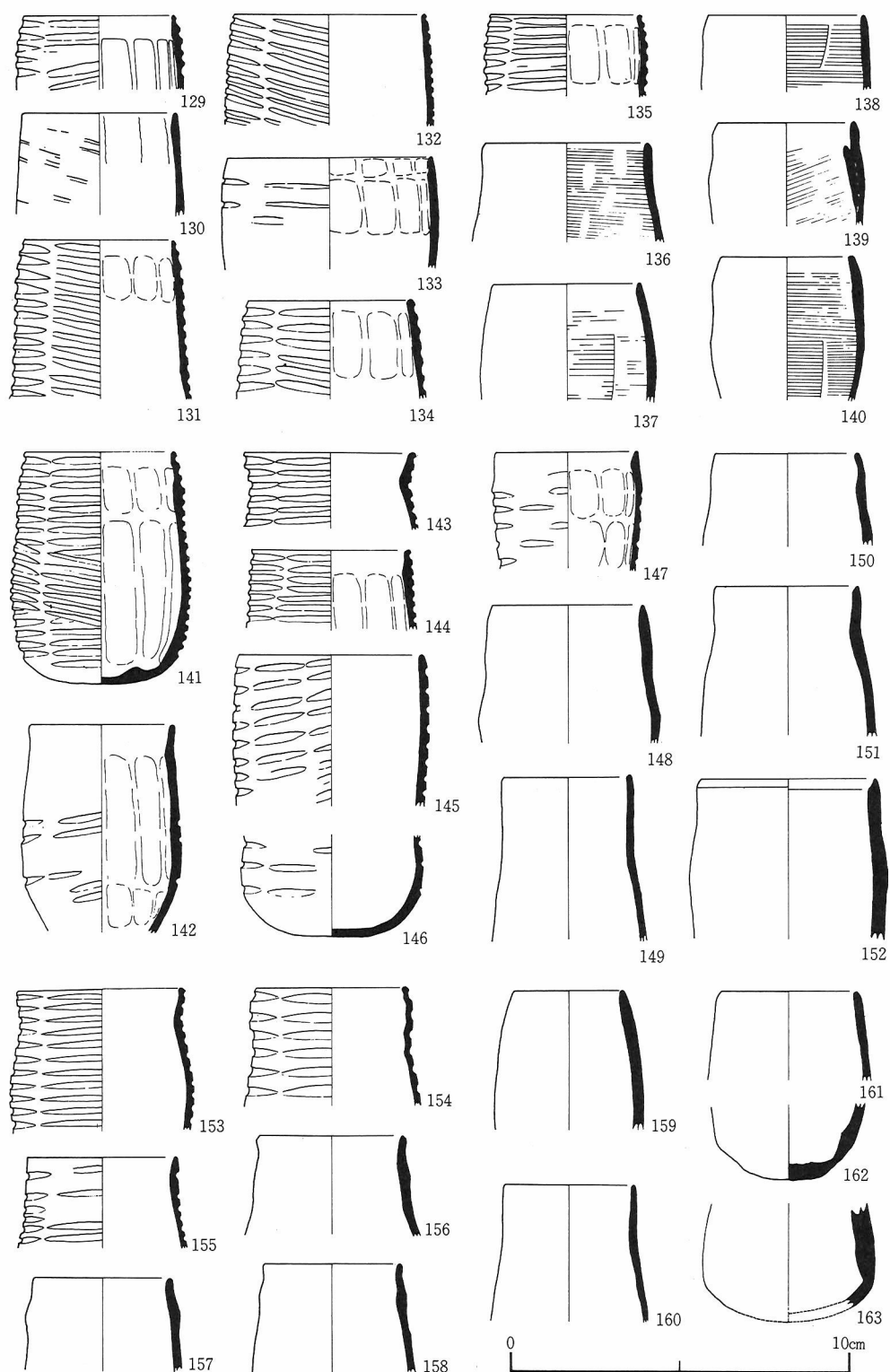
第8図の175～178は昭和58年の調査で出土した奈良時代の製塩土器である。いずれも細片のため器形は不明である。胴部外面を指ナデ調整し、内面をナデ調整する175～177と内面に布圧痕を残す178がある。今回の調査では23点出土した。この中で布圧痕を残すものは1点ある。

西ノ辻遺跡

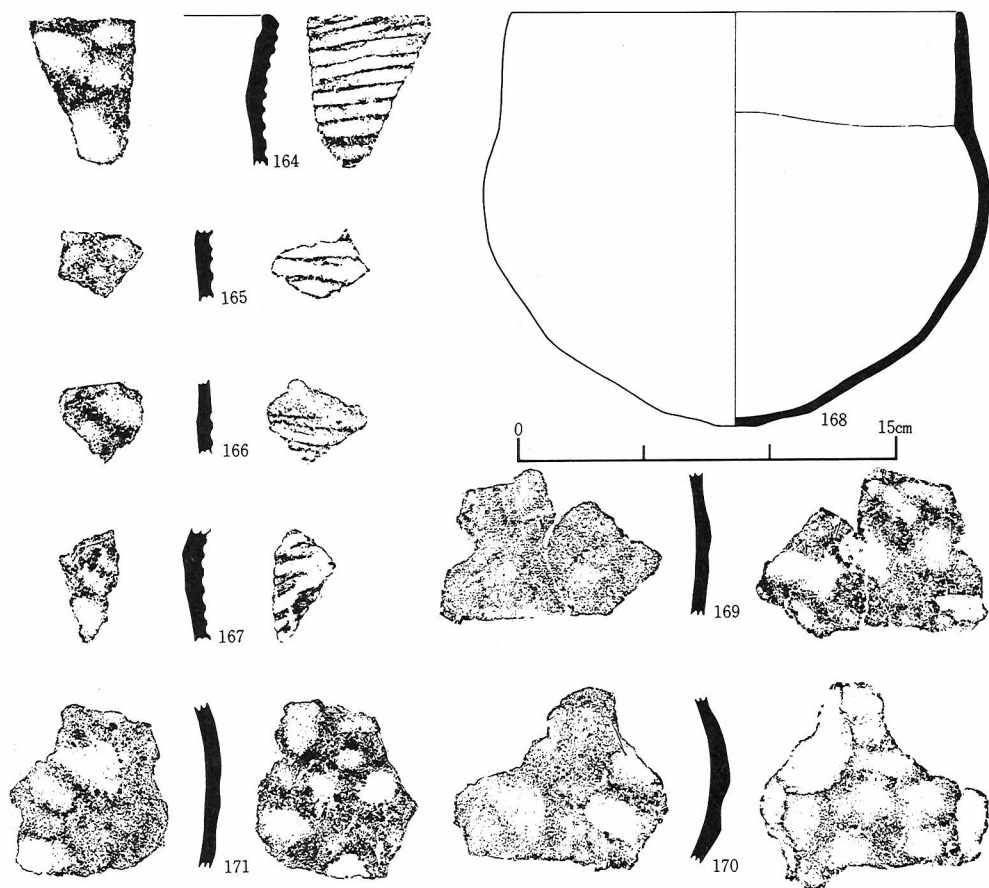
西ノ辻遺跡は東大阪市西石切町から弥生町にかけて存在する弥生時代～中世の複合遺跡である。標高15～20mの扇状地上に立地する。当遺跡は昭和10年代に調査がなされ、弥生時代後期の土器が出土した。出土した土器は各地点ごとに型式が設定され、弥生後期編年の基本資料となっている。また、近年数回の調査がなされており、弥生時代中期の方形周溝墓や中世の遺構も検出されている。

製塩土器が出土したのは、昭和56年百光社ビル建設工事に伴う調査の際である。調査地点は旧高野街道の東で、国道308号線の南に位置する。この調査では弥生時代中期～古墳時代にかけての自然流路と中世の井戸、溝を検出している。弥生時代中期～古墳時代にかけての自然流路は幅約7m以上、深さ約2mを測る。自然流路内の下層は黒色粘土が堆積し、この中より弥生時代中期の土器が多量に出土した。また、上層はシルトと礫が互層をなして堆積し、この中より古墳時代の土器が出土した。製塩土器は上層からである。共伴遺物は須恵器、土師器がある。製塩土器は共伴遺物からみて5世紀末～6世紀である。

第6図141～152は西ノ辻遺跡出土の製塩土器である。図化しえたのはAタイプとDタイプのものがある。141はDタイプのもので、胴部下半がやや張り、口縁部は直立する。底部は丸底である。口縁部径4.4cm、器高6.8cm、器壁の厚さ2～4mmを測る。外面のタタキは3本/cmでほぼ平行である。今回の調査では64点の製塩土器が出土した。



第6図 製塩土器実測図(129~140鬼塚遺跡・141~152西ノ辻遺跡・153、
154水走遺跡・155、156若江遺跡・157~163鬼虎川遺跡出土)



第7図 製塩土器実測図(水走遺跡出土)

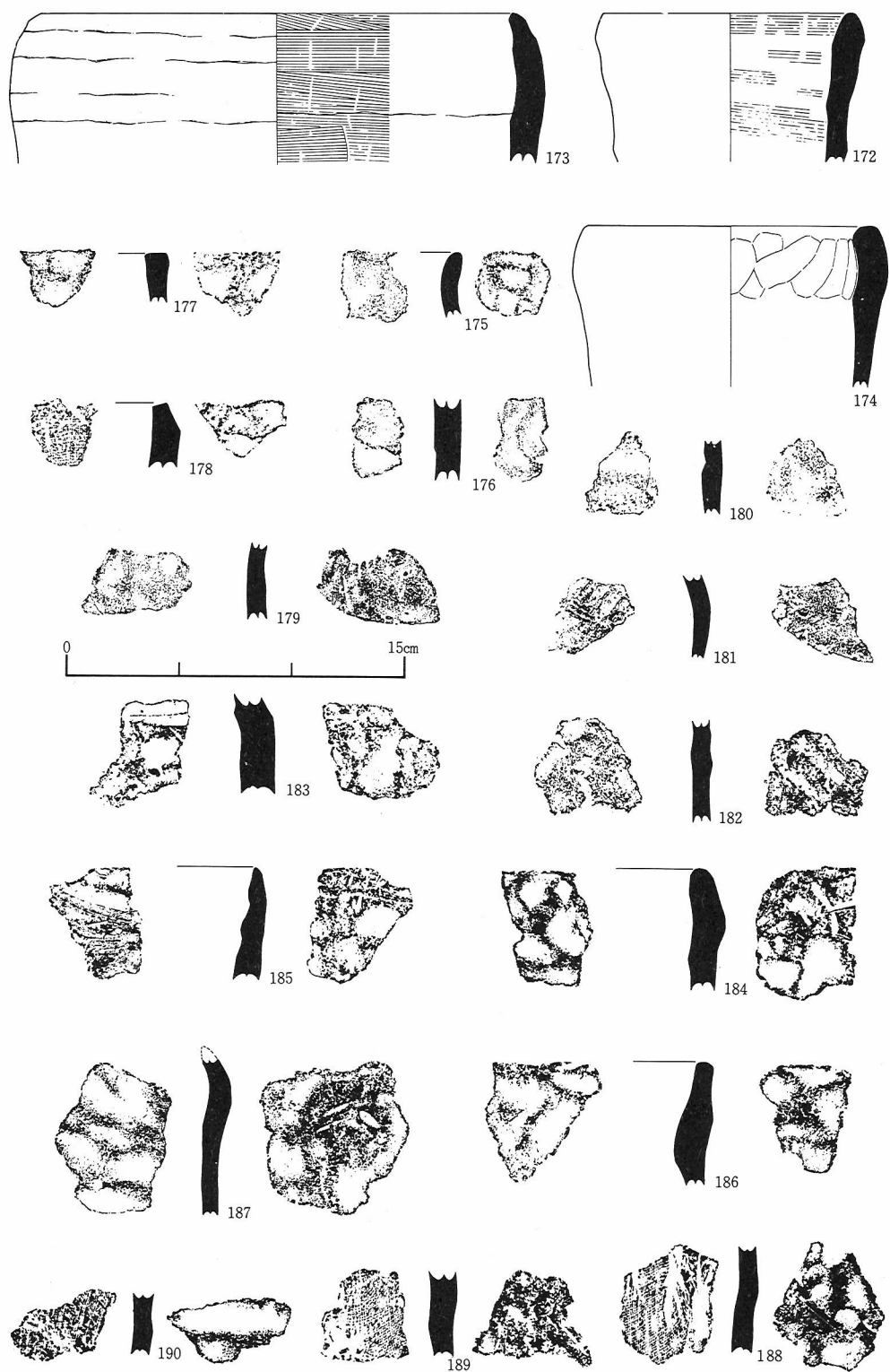
鬼虎川遺跡

鬼虎川遺跡の製塩土器出土例は今回新たに1例加わり、計3例となった。製塩土器が出土したのは、昭和57年の国道308号線拡張工事に伴う立会いの際である。当地点は鬼虎川遺跡の東端に位置し、以前に弥生時代の方形周溝墓を検出した所である。製塩土器は地表下1mの古墳時代の遺物包含層より出土した。調査範囲が狭いので明確な遺溝としては、甕棺墓1基を検出ただけであった。共伴遺物は須恵器、土師器、滑石製小玉がある。製塩土器は共伴遺物からみて5世紀末～6世紀初頭である。

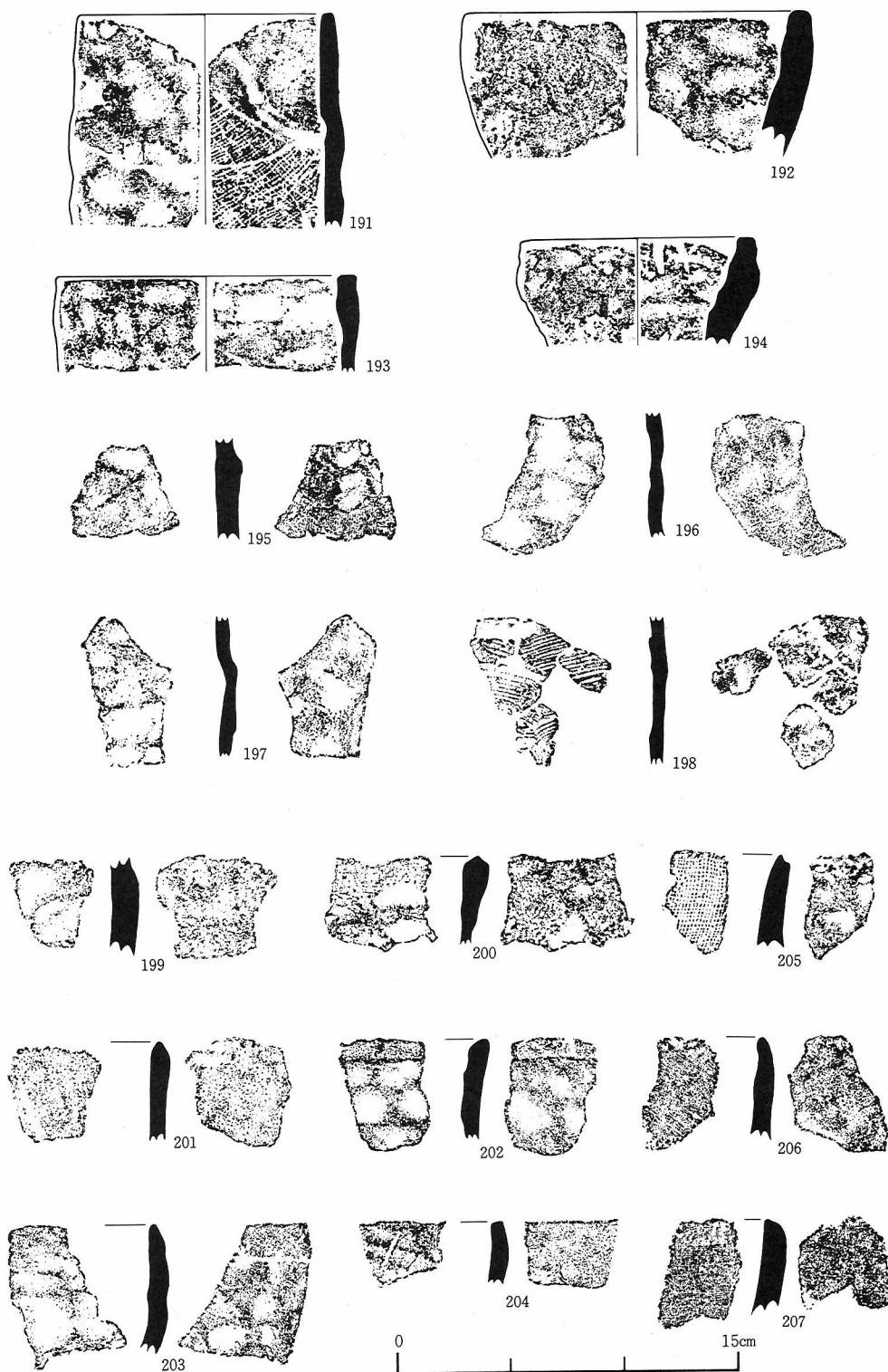
第6図の157～163は鬼虎川遺跡出土のものである。図化しえたのはAタイプのみである。今回の調査では64点出土した。

水走遺跡

水走遺跡は神並遺跡と同様に軌道東大阪線建設工事に伴う試掘調査で存在が確認された。試掘調査は昭和54年に国道308号線中央分離帯で実施した。調査区間は、現在の恩智川と中央環状線間である。試掘調査の結果から恩智川と長田間の約1kmは本調査が必要となり、昭和57年



第8図 製塩土器実測図(172~174、181~190若江遺跡・175~178鬼塚遺跡・179、180水走遺跡出土)



第9図 製塩土器実測図(神並遺跡出土)

に第2次調査を実施した。

第2次調査は200㎡～500㎡のトレンチを9ヶ所設定し、西側より第1・2トレンチと仮称し、東端を第9トレンチとした。製塩土器が出土したのは、最も西の第1トレンチからである。第1トレンチでは溝1と自然の落ち込み2を検出した。製塩土器は庄内期、古墳時代後期、奈良時代の遺物が混在する包含層と自然の落ち込み内から出土した。各時期の遺物出土状況は上層に奈良時代、下層に庄内期のものが多く認められたが、明確には分けられなかった。製塩土器は古墳時代後期と奈良時代のものがある。古墳時代の遺物は須恵器杯、甕があり、奈良時代の遺物は須恵器杯、椀、甕、羽釜などがある。また、ミニチュアの竈、甕、鉢など祭祀的色彩の強い遺物も出土している。他に木製品は火鑽臼、下駄、鉄製品は刀子、鏃、斧、土製品は土錘がある。

第6図153・154、第7図164～171、第8図179・180は水走遺跡出土のものである。153・154はDタイプのもので5世紀末～6世紀の時期である。164～171も薄いものよりはやや後出であり、大型で器壁が厚い点も異なる。168は底部がやや尖がりぎみの丸底で胴部は張る。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終る。口縁部径18cm、器高16.5cm、最大腹径20.2cm、器壁の厚さ4～8mmを測る。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面は指ナデ調整、内面はナデ調整する。胴部外面は二次焼成の痕跡と煤の付着が認められる。胎土は1～5mmの石英、長石を含み、焼成は硬質である。色調は灰褐色を呈する。168以外は口縁部及び胴部の破片である。164～167は器壁の厚さが0.5～1cmあり、外面は荒いタタキ、内面はナデ調整する。胎土は1～2mmの石英、長石を含み、焼成は硬質である。色調は灰白色、黒褐色を呈する。169～171は168と同タイプの胴部破片である。第8図の179・180は奈良時代の製塩土器である。共に胴部の破片で外面を指ナデ調整、内面をナデ調整する。他に細片ではあるが、内面に布圧痕の残るものもある。古墳時代のは27点、奈良時代のは4点出土した。奈良時代のものの中で布圧痕を残すものは1点ある。

若江遺跡

若江遺跡の製塩土器出土例は今回新たに2例加わり、計4例となった。1例は昭和55年の府道四条・長堂線拡張工事に伴う調査で出土した。製塩土器は中世の溝内堆積土から出土しており、混入と考えられる。また、他の1例は若江遺跡周辺からの採集品である。当遺物の採集年月日、詳細な採集地点は不明である。採集された製塩土器は奈良時代のものであり、共に採集された土器はバスケット一杯ある。主な遺物は須恵器杯、甕、土師器皿、杯、羽釜などがある。他の時期の遺物は混じらない。

第6図155、156は府道四条・長堂線拡張工事に伴う調査の際に出土した。155はDタイプ、156はAタイプのものである。本調査では3点の製塩土器が出土した。製塩土器の特徴からみて5世紀末～6世紀の時期と考えられる。

第8図172～174、181～190は若江遺跡周辺から採集された奈良時代の製塩土器である。172は胴部が外方へ広がり口縁部に至る。口縁端部は尖がりぎみに終る。口縁部径11cm、器壁の厚さ

1.3 cmを測る。胴部外面は指ナデ調整し、内面はハケメ調整する。胎土は1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。焼成は硬質で、色調は淡褐色を呈する。173は口縁部が内弯し、口縁端部が尖がる。口縁部径21cm、器壁の厚さ4cmを測る。胴部外面は指ナデ調整し、内面はハケメ調整する。胴部外面には接合痕が顕著に残る。胎土は1～5mmの石英、長石、クサリ礫を含む。焼成は硬質、色調は淡褐色を呈する。174は外方へ広がる胴部より口縁部は内弯する。口縁端部は丸く終る。口縁部内面には指頭圧痕が顕著に残る。胎土は1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含

む。焼成は硬質、色調は二次焼成を受けて変色し、赤褐色を呈する。181～190は径の復元不可能な破片である。181～187は胴部外面は指ナデ調整し、内面はナデ調整する。器壁の厚さは大部分が1cm前後である。胎土中には石英、長石を含み、焼成は硬質である。184・187は須恵質にちかい。188～190は胴部外面は指ナデ調整し、内面には布圧痕を残す。布圧痕には疎密がある。1cmあたりの糸の本数は188が16本、189が12本、178が30本である。胎土中には1～2mmの石英、長石を含み、焼成は硬質である。色調は灰褐色を呈する。他に布圧痕を残すものが9点あるが、最も糸数の多いものは60本である。奈良時代のものは30点ある。

IV まとめ

生産地における製塩土器の研究は近藤義郎氏⁽²⁾や石部正志氏⁽³⁾などの先学諸氏の大きな業績がある。近年、生産地（いわゆる海浜ぞい）のみならず内陸部においても製塩土器の出土例が知られるようになり、研究も活発になっている。例えば野島稔氏⁽⁴⁾は大阪府下における製塩土器出土遺跡の集成をされている。また、奈良県では岡崎晋明氏⁽⁵⁾が庄内期から奈良時代の資料を中心に型式分類し、生産地の究明をされている。岩本正二氏は奈良時代の資料を中心に型式分類し、

タイプ 遺跡名	A	B	C	D	E	F	合 計
縄 手 遺 跡(昭和48年)	118	0 0	1	32	0	0	151
縄 手 遺 跡(昭和52年)	13	0 0	1	1	0	0	15
縄 手 遺 跡(昭和55年)	336	3	4	118	1	0	462
鬼虎川遺跡(昭和52年)	0	0	0	1	0	0	1
★鬼虎川遺跡	52	1	0	11	0	0	64
芝ヶ丘遺跡(昭和50年)	10	0	0	7	0	0	17
芝ヶ丘遺跡(昭和54年)	279	1	1	61	1	1	344
日 下 遺 跡	11	0	0	5	0	0	16
若 江 遺 跡(昭和53年)	1	0	0	12	0	0	13
★若江遺 跡	2	0	0	1	0	0	3
西岩田遺跡	9	0	0	3	0	1	13
意岐部遺跡	26	0	0	11	1	0	38
★鬼塚遺 跡	1,252	33	35	153	4	0	1,477
★神並遺 跡	106	0	0	18	0	0	124
★西ノ辻遺跡	36	3	0	25	0	0	64
★水走遺 跡	20	0	0	7	0	0	27
合 計	2,271	41	42	466	7	2	2,829

第1表 5世紀中～6世紀の製塩土器出土点数 ★は新資料

集成されている。⁽⁶⁾内陸部における製塩土器の研究は途についたばかりではあるが、諸氏の研究によって明確になりつつある。前回、集成した以上に東大阪市域においては製塩土器の出土例が増加しており、今回も、製塩土器研究の一助になればと思い、資料の集成をおこなった。以下、当地域のものについて若干の問題点を記したい。

東大阪市域出土中で最も古い製塩土器は庄内期に並行する時期のものが確認されている。近年、畿内における調査、研究によると内陸部において製塩土器が出現するのは、弥生後期末～古墳時代初頭からである。当地域でも同様な状況である。庄内期の製塩土器出土例は若江遺跡、西岩田遺跡の二例があげられる。製塩土器出土状況をみると大部分は破片となって検出されることが多いが、今回資料紹介した西岩田遺跡出土の1は形態、調整法などが良くわかる資料である。当資料は形態が平底を呈し、体部の立ち上がりが急である。調整法は外面はタタキを施し、内面をナデ調整する。同タイプの製塩土器は大阪湾沿岸から和歌山県にかけて類例が多く見受けられる。例えば和歌山県加太遺跡、しょうぶ谷遺跡、大谷川遺跡、鷹島遺跡、古目良遺跡などがある。近藤義郎氏は古目良遺跡出土のもので目良式B類に分類されており、⁽⁷⁾当遺跡のものも類似している。当時期の製塩土器は生産地の海浜ぞいでは多いが、内陸部においては出土する遺跡も少なく、量も少量である。

東大阪市域においても他地域と同様に5世紀中～6世紀にかけて製塩土器の出土例が急激に増加する。現在、確認している限りでは11遺跡ある。遺跡からの出土量も多い。当時期の製塩土器の研究は近年多くの研究者によってなされている。また、集落内で使用された状況を残す遺跡も少ないが発見されている。例えば、大阪府四条畷市奈良井遺跡では石敷製塩炉が一基検出されており、この集落内で製塩をおこなったことがうかがえる。⁽⁸⁾奈良県の伝承飛鳥板蓋宮第34次調査下層、布留遺跡からは土坑状の遺構内から灰や炭化粒と混入して多量の製塩土器が出土しており、製塩を中心にした生産に伴う祭祀であったと岡崎氏は考えられている。⁽⁹⁾東大阪市神並遺跡では溝内の二ヶ所に一括、廃棄した状態で出土している。検出状況をみると製塩土器と炭及び灰が多量に混じっている。このことは集落内で製塩土器と共に火を焚いたと考えられる。製塩土器にも火を受けた痕跡が残っており、火を受けた時に良く残る縦の剝離痕が大部分のものに認められる。直接、製塩したか祭祀あるいは焼き塩の為かは現状では結論づけがたいが、少なくとも集落内で製塩土器と共に火を焚いたことがうかがえる。また、各タイプの出土状況であるが、前回資料紹介した時と同様の傾向である。多量の製塩土器が出土した鬼塚遺跡をみるとAタイプが大部分をしめ、次にDタイプが多い。このような傾向は今回資料紹介した他遺跡にも認められる。東大阪市域で搬入された製塩土器はA、Dタイプが主流をしめる。前回、資料紹介したものは口縁部径5～8cmで器壁が薄いものばかりであった。今回、水走遺跡出土の164～171は口縁部径18cmで器壁の厚いものであり、薄いものよりは後出と考えられる。

奈良時代の製塩土器は4遺跡で確認した。岡崎氏は奈良時代の製塩土器をⅠ類～Ⅳ類に型式分類されている。⁽¹⁰⁾東大阪市域では神並遺跡より当時期のものが多量に出土している。岡崎氏の型式分類されているⅠ・Ⅱ類が大部分をしめⅣ類がわずかにある。Ⅲ類は今回、出土していな

い。製塩土器の出土例はさらに増加すると考えられるが、今後の調査、研究に期待したい。

注

- (1) 東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度を参照。
- (2) 近藤義郎 「師楽式遺跡における古代塩生産の立証」『歴史学研究』223号 1958。
「家島群島における師楽式遺跡の調査」『家島群島』1962。
「古目良遺跡」『田辺文化財』8 1964。
近藤義郎・渡辺則文 「製塩技術とその時代的特質」『日本の考古学』VI 1967。
- (3) 石部正志・白石太一郎 「若狭大飯」『同志社大学文学部考古学調査報告』第1冊 1966。
- (4) 野島稔 「大阪府下における製塩土器出土遺跡」『ヒストリア』第82号 1979。
- (5) 岡崎晋明 「内陸地における製塩土器」『橿原考古学研究所論集』第4 1979。
- (6) 岩本正二 「7～9世紀の土器製塩」『文化財論叢』1983。
- (7) 近藤義郎 「製塩」『日本の考古学』V 1967。
- (8) (4)に同じ
- (9) (5)に同じ
- (10) (6)に同じ